

看護の人間学
- 鈴木大拙の思想を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

対人援助関係は援助する側とそれを受ける側という二者関係で成り立っている。援助する側はそれを受ける側の利益に向けて援助活動を行うが、そのことが受けた側にとって本当に良かったのか否かを評価していくことはそう容易なことではない。それゆえ、援助する側にとって、「自分の行ったことが援助といえるのか」という問いは、対人援助を専門職とする立場にある者にとって、常に持ち続けるべきテーマである。

代になり、科学を中心とした西洋的な見方が主流となって社会全体が発展してきた。対人援助を専門職とする医療、看護、福祉、教育なども、その恩恵を受けて著しく進歩したことは言うまでもない。しかし、これらの分野において、現代は様々な問題が生じており、西洋の合理主義的な見方だけでは、それらの問題を解決することが困難な状況にあるのではないだろうか。本論文では西洋的な見方にはないものとして、今こそ東洋的な見方から対人援助を捉え直すことの必要性が論じられている。

そこで、対人援助職の一つである看護について取り上げ、筆者が実際に出会った患者への看護体験をもとに、鈴木大拙の思想に照らしながら、「人間」「存在」「生死」「関係」「援助」という5つの視点に沿って考察する。鈴木大拙は多数の英文著作や講演活動を通して西洋世界に「禅」をはじめ仏教思想を広く紹介した人である。鈴木大拙は、自らは東西の「間」にあって、西洋と東洋に向けて世界にとっての東洋の意義を説きながら、世界に向けて自在に自己が開かれていることを禅を通じて体得した人である。人間は複雑な存在であるが故に、患者と看護者という二者の間には、簡単に説明しきれないことが多々生じる。看護の対象である患者は一人の人間であるということはもちろんのこと、看護者自身が一人の人間であるということをあらためて自覚することによって、新たに見えてくるものがあるのである。

本論文は、鈴木大拙の思想から学びつつ、西洋の合理主義的な看護観を批判的にとらえ返し、東洋的な見方を含みこんだ新たな看護のあり方を探求したものであり、今後の看護の発展に寄与できればと願うものである。